秋月悌次郎の生涯

束松峠

東京青山霊園にある秋月家墓地

秋月悌次郎(あきづきていじろう)は、

- **会津藩校日新館と江戸昌平黌(しょうへいこう)でトップの成績**
- **軍事奉行添役(そえやく)として戊辰(ぼしん)戦争を戦い若松城開城交渉をする**
- **西軍の奥平謙輔に束松(たばねまつ)峠で山川健次郎と小川亮(あきら)を託す**
- **小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が「神のような人」という**

文政７年(1824) ７月2日、本家は高遠城主の保科家家臣で、分家、丸山四郎右衛門胤道、会津藩士150石の二男として米代二ノ丁で生まれる。丸山から秋月に改姓し、秋月胤永(かずひさ)という。

会津藩校日新館に入ると、その才能が発揮され、飛級で大学・講釈所に進み、19歳で藩の給費生として江戸に出る。23歳で昌平黌に進み、27歳で副舎長・助勤(じょきん)となり、31歳で全国一の秀才となる指導監督役の舎長(しゃちょう)として3年間勤めた。

悌次郎の略歴

天保4年（1833）10歳で会津藩校日新館に入学。
天保13年（1842）19歳で藩より給費を得て幕府儒官の松平慎斎(しんさい)から漢学を学ぶ。
弘化3年（1846）松平慎斎の推挙により昌平黌に入学。安積艮斎(ごんさい)に師事。
安政元年（1854）31歳で昌平黌の書生寮舎長となり3年勤める。
安政4年（1857）34歳、藩に願い出て、西国遊学をし萩(はぎ)などを回る。
安政4年（1863）40歳、薩摩の高崎佐太郎とともに、討幕を計画していた長州藩士と公家の三条実美らを下関に追放した「七卿(しちきょう)落ち」、「八月十八日の政変」を実行する。
元治元年（1864）3月、公用局の職を解かれ会津に帰る。
7月、京都で「禁門(きんもん)の変」がある。
慶応元年（1865）42歳、7月、蝦夷(えぞ)代官として知床半島、斜里に左遷される。妻美栄と結婚。
慶応2年（1866）12月、藩命により会津に戻る。翌年3月、京都で旧職に戻る。
慶応4年（1868）鳥羽伏見の戦い、藩の参謀役・幌役として越後方面に出張する。後に、城に入り軍事奉行添役となり、米沢藩・土佐藩と開城交渉をし、開城式に容保公とともに列席する。
10月7日、猪苗代謹慎中に出て、越後の奥平謙輔に山川健次郎と小川亮を託し、磐梯山が見える束松峠(茶屋２件あった)で「北越潜行の漢詩(かんし)」を詠み、11月3日雪の中猪苗代に戻る。
明治4年（1871）47歳、美濃高須藩預かり後、11月9日、青森の斗南藩(となみはん)へ行く。
明治18年（1885）61歳、東京大学予備門教諭となる。翌年東京第一高等中学校教諭となる。
明治21年（1888）妻美栄死去。
明治23年（1890）67歳、丸山ウラセと再婚。9月、熊本の第五高等中学校教授となる。
明治27年（1897）71歳、熊本第五高等中学校を退職し、若松に帰る。
明治33年（1900）1月4日、従五位に叙する。5日77歳で死去。墓は東京の青山霊園にあり、友人の南摩鋼紀(なんまこうき)の撰文石碑が脇にある。（秋月悌次郎顕彰会会長　石田明夫）

図・写真・文　©石田明夫2017　問合せ　TEL・Fax 0242-24-3423　090-1378-8087
メール・ホームページ「会津歴史観光ガイド協会」で検索。